後漢書編 執筆譚

五

へ 13
2·003
子止

本清

門へ 13
號 2003
5

淺間嶽面影草紙後帙

五 逢州執着譚

笠亭仙果 著
種彦 著

第九

逢州が幽魂己し亟を清涼山に誘引
石橋の話現金色の獅子王牡丹狂事

そもそも夜風烈しく吹て。雨北に雲起て東南に雨脚よく降ぐ。
浅草の松もまぶさん。良治不斗眠覚て枕のもとうを顧れば怪の女ぞあり
れう。雨にぬれしる桃眼霧に咲嵐に乱しる柳髪なまめかしうにおれ羅
綾の袂鮮よ錦繡の裾斜ゆうるかゝに公おどろき。女客にハ行人にて
や在らん実に現とも覚ぬ。慎畏ていひけれハ。女うちつゝひ
君にハ知ぬ妾を視忘れ給ひしあなうらさるゆ心うゝと打恨

良治式部不審をなしてつくづくらまもりて大に驚きさいへばまことの人にはあらざるべし。人でにかくて死つるとゆめ〳〵ゆめにはかねて所存なきさまよりひきてしが徒なる其方の姿あるは猶〳〵一しほ驚きたびけり。遠州六郎帆とする面持にて妻は君に別れまいらせてより不良もくるにかくる。憂や浮世の夢かな。蝶の翼の白粉も風に乱て草隱れぼまゝきれにかゝり侍り。唯忘れがたきは互の意路。悲しいかなる。胸の煙とくべうべ。伐間の山も数うゝど。閑居にあり〳〵其背後羅と切て方茵とをしてい。朱房玉楼のうちに眠る。錦繡を裁く衣を堂てい。紫殿宝閣の〳〵人に植び且に酒の泉を汲夕に肉の林に殺へ夏の夜の稲光は雲に文あり。とのゝなぐも。秋の夕の白露は玉と嫌をりて。ゆくゝりのこゝをれど。仮に無常迅速の理をもつざれば織土の迷倒の離しぼ土の快楽をうけんかとうつ。栄耀に飽元三宮を信ぜざるべし。

氷く八寒の氷に煙れいとく焦熱の佛説に溺べりしを。耶孝順の志あるに。忽ち五障の雲を消除し。南方无垢の月をうべあ。覺華西刹の宮殿に植べ刃ゝなりゝね。君と妾が縁にしゝ一席に尽くしがたき物語あり。

さるべ式方へまゝ〳〵せのくとゝ式それば。良治も文に夢現のさうひさもゝ。白雲に乗じて蒼天に登がごく。霞を分雲をさるべ。或い白雲花を帯て。老松枯とうゝぶる嵩山にいる。或ハ猿猴雲に叫び妻ゝ嶽に滝ぐ高峰を過て。ゆきくて最危き高嶺に懸ぬさて。遠州巴ゝ巫に参くく吉にも独りゝ式所ハ唐土清涼山とゝくにくゝあれにゝ見つるが名しゝ扨〳〵石橋まゝ。むうひハ文殊の浄土にて常に主歌の義ゝり夢と言葉にも演ぐゝとゝくに。良治答てかくゝそゝき昊場に行等の由拙をゝくゝ。式ゝ誘引

きさらし。同遊州又曰君はきつ世にゝ。参議左大辨洋光の息男。大江定基
といふ。人なり。回翁の風赤坂の力壽といふる遊君に到て。五日に契ふかく
けるが。无常の風防がず。遂に彼力寿息絶眼用ねんべ枕を双べ而
を同じうせし。移香を留て終ぬる姿なれど。色欲の愛執いまだ
七日を経ず。野外に送て憲慕の火に哀傷の胸を焼。別離の涙に袖を
浸す。是を逆縁の善知識とぞ。忽地に出家して。比叡山横川厳院
恵心先徳の室に入。叡熊法師とゝ則法才なり。四教三観乃翰墨
を習。佛知佛見の奥旨を得つゝ。今生の回司とぞなれり。妻
の前生に彼遊君力寿なり。されば君と縁に結びし宿世なりとぞ。
なる奇瑞とゝ。往昔長保五年秋八月廿五日に才の前生叡聖
法師に唐にて。武清涼山にいたり。大聖文殊の尊像を拝し奉て。

由緒をとゝ。君を再び武所に誘引まつりて。首尾を物語る。良治益
奇異の物ひとをゝ。遠近を顧れど。めなれに山を遠く来ることおびゝし。
雲天涯を立隔。撫歌牧笛の声さへも。和らかにして石橋を
見わたせば其面僅にして。苔むしたる谷ふく。ちさへ泥梨もちりて浪の
虚空を渡るぶくみく。雲に聳る粧ひを。譬べ夕陽雨の後に虹を渡
せるごとゝ。又弓を引る姿に似たり。庵津瀬に雲ゝ落て
数千丈の庵坪に秀ゝしく。見るにさへ才の毛もいよぶ。我々
巖石に最危くかゝる石の橋なり。是ぞ吾日本までも。その名
かくれなき石橋なりけり。何代にか作りつゞけり。語りてもとゝ
遂に曰。それ天地開闢くりよりの名。雨露をとゞめて風土をはぐくむ。是則
天の恵橋とぞいふ。其外四土世界において。橋の名所さまぐにて。水波

死て死より殘れ枝うり外轉奥そうへあり獅子の
芳あびうぬ草木と成き時あれやむ紫の秋
と舞かゝでければ。彼獅子王も共に。狂ひうろ〳〵と足えゝうう折しも。紫雲靄
靄そ〳〵く是正に文殊菩薩の影向とおぼし。善巧丹菓の香魚にしく。宮
智金花の容顔なる弓仏滿月の如き光明を放て。獅子の座にかゝ
ゆひければ。良治愕然そ〳〵く只目を〳〵奇りぬ。遊州又曰。足のふ〳〵く妄天
堂に化樂を交とつゝど。父の讐を討ぶる。主念ぶ。利那も存〳〵よ〳〵
さ。故をとく。君が妹寄居虫が閑居に携引まつ〳〵せさ。又他人の性名ハ
告まつ〳〵るにおよび。自素おもひ當りもとめぐまに〳〵。力を落く
雙眼に詩とゆうれとつゝ。涙を潸然と落し。嘆しく時もの所方うう悲
嘆忽ち瞿表姫を狂死つゝ。今共に。主間地獄に墮。若幸無量あれ

三時を過ぐ。南方〳〵老僧のいつゝとあるべ。あれ仏の化身なりかろ
仏僧に諾して。抜苦与楽の法養を勤めゝ。かゝる〳〵ど奇瑞めぐ〳〵つゝ
とゝこれかぶり。余波の三〳〵といひかけ。立別んと色ければ良治者きまぶ
少時待まつゝ支めつゝと。裾をきつゝとゝふゝるゝと。ゆひ〳〵彼寄居虫がうち
ゆ。遊州が袖を抱て夢覚〳〵。時に異香一室にかぐ〳〵ければ良治奇
異のおもひをなす。傍をうかゝるに。ちぐれ〳〵ども名香とかぐ〳〵き空炷
金色の蝴蝶一雙優然そ〳〵く飛廻り。翩て秋くゝる光景を佰度うゝめ。
実風情の夢〳〵ゝ。ゝかきりのハ浮世なり。世に遠ど遊が亡人の
数に〳〵。ゝひを夢に告〳〵にやめ〳〵ん又雌雄の獅子王ゝゝつゝん代一雙の
情なり。ゆゝ拝〳〵といつゝく〳〵あゝ〳〵。誰きゝれよとゝ代柏〳〵ゝ人ば頓前奇
居虫小獄〳〵助両人は前にまつゝけ。さて良治ひけゝ先小女に問べきと

あり。此奇南ハ正しく我秘蔵なるまろの。白壮丹といふ名香とおぼし。
去頃拙君逢州に為て他に所持する者めぐりとも おぼえず 又逢
州が和好しく。猶在せ〜桂とうひ我悉おぼくめり。一定此丸ハ彼に由緒
ある者ぞうんつまるど語りてよと仰ければ。寄居虫も頭をさげ。長
浅間良治公にくどあるう。ふ縅の座に歩行して妾もおどろき付人
うう。君にもかねて俚名ハ。まよ〜やつるとめくん。妾則逢州の妹寄
居虫に付る。父国の一斉。非命に死せる一條ハ必定姉逢州よりまさんたう
とおぼしれが。今又こゝにおよびぬ。又此茶道の付出ハ。乾坤二巻ハ姉
妹にひきうけ。持うしが。折もめぐべ。君にそまろしとある。父の遺物に
ようとうと。姉逢州が者のくハいふ文かり立て逢拙舫花が自害の
と。田字草の老女と狐子の名告せ〜と。父の讐を討んとう袖おひと

なつ〜と徳てあしとでも高ま〜ことど語りける。良治もかそねくの苦
徳と感じ。今ハ者のつるぞく。よぎつるとハ逢州より伴にさけう。又茶
道の付出。くに我よりあつ〜ぐ。半にして度の豆ごろ伐。本三ろうと
ひしぶ。いまゝ者に一巻を引。首尾全く合度さうとまたびつ。爾に寄居
虫がおぼをつる序にうそる賊布をうちかくしく熟視て。あ〜のやしむ
べの是こそ琵琶魚といふる魚の皮にてつくれる賊布にく。我さめうちに
金成おさるハ者の父に諾せ〜ぶ。其夜殺害をうれ。金も奪ひうく〜れし
よ〜きけ。つくに〜く再此丸ハ引つるやと問ふ。拭と助曰。そのとハ小子小
女に問く詳にきれう。其金の如此ごとの故にく。拭餅花ぞのうり牡つ
るうんべ原ハ星敷土たるが呼持の賊布をうべ〜と又にうう。良治皆うち素
に。陸奥にく土たるを追放せ〜も一斉が対れつるも門日とうひ殺に此賊布

を所持うるとばかり考れば一奇を村そう。金を棄ひ〜〜そもの国に出たう
ゆ〜〜ともろべ〜〜ど。僧の夢に逢州我に向ひ。故の性名ハ告どとくゞ。
自未ひめるとめぐ〜とゝひつゝん。必定是うゞ〜といひけれ。宮活出
ふ掃を徴とうちそれにてなりひめうゝ。立く義士たちと戦ひ〜其こも。
形を隠まし幻術を学ようひ〜〜〜。父の今殺の恥がうん。恰も答節を合
もぶゞ。既に数ハ彼なゞ〜と。五〜義ゞのらひひ〜。ぞそのうゝ
ある證拠のあるゝハ。切平ゞ飯ゞ〜〜屋ゞ者ゞ討こ〜ん。掛軍
ひまちつ。微笑男〜ゝ〜る折〜もうし。切平ハ一人の老僧ゞ清ゞ。
友〜けるあゞ。宮居虫ゞまびつ。過刑〜の一二を拙がうけしバ。切平
も奇異のおりひを色。巴〜亟を敬つ。末坐に居ぬ。ゞ時良伯。切平ゞ俱〜来
ゞ〜。老僧の最そ亟かるに。ゞく帰依〜。行全のゝ〜りやと問切平いゞ我も

何地いるくといてこんちゝざれど只両にそぶらも行方ひのゝどこらに忍ぶ。
うりうひまゝせうと查ゝ良信忽地夢中に遼州がいひしとゝ成なりひ出。
老僧の成りて上坐に成りて叮嚀に礼をなすていひけるゝ我面様ここ
の夫夢を見ゝう。又如此ゝの昔あり。やゝに此家へ南面なれば南方より
いつる僧あり。こゝ。果ゝて老師のゝなる。頭ゝに大位の功力に依て時々ぶ夫れ
裏を憑ゝ成仏得脱なるゝゝ。ゝ。只管に頼けれが老僧あくく辞する
色なる。我も一大夫の因縁ありて来れり。言葉を発ゝ日人変なるれと。
珠数を袖ゝに持て和ゝ之上ゝ。何やゝんにのゝちに唱ゝとゝえつるが時
に風吹くゝ出しまゝう。逢州が袿紙紙ゝて。ゝゝすゝゝ人の其ゝのゝ。
老僧の傍に歩ゝう。何方とゝなくゝる悲ゝげる声ゝて。人間萬事酔泥
ゝど。氷の上に降雪。砂の上にあゝ雲のゝ。なくゝきてゝくのとゝなる。寿紀

人ゝうなゝ。今に輪廻の苦をもゝゝど。かゝるもゝ只ゝ未来永劫にも何人か
揖をゝゝ。生死の海と陸ゝん。意ゝの闇宿。ゝゝかゝの心安世界と。而ゝ
と法かるゝゝ。声あれゝどゝ衣に姿ゝ見ゝて。ゝ成袿ゝ出ゝて。老僧の前
に胡蝶に似ゝう。老僧曰汝ゝ人ゝ。ゝりのゝ。又袿に声ゝあゝて。ゝ妻ゝ則良ゝる
の側室時ゝるとゝて。ゝのゝ。命終の竜神元間地獄に墮ゝ。刹那も責責
乃間ゝゝとゝど。大位の化身にのゝゝんゝゝ。姉の袿に陽世乃。竜を
再ゝゝ。老僧又曰汝いんぞ地獄に墮ゝ愚なる間どゝ。夫佳人の
女子をゝゝ。女子ハ佳人を愛も。女ハ容の艶ゝ。姿のゝゝゝゝゝゝ
ゝけ。才のおゝゝ成ゝゝゝゝゝゝ。妻十分の艶色ハゝゝゝゝゝ
ゝて尽と横陳ゝゝ。才ゝ忽ち醜婦とゝゝゝ。妻ゝ成酒に和ゝ。飲ゝ
故にゝゝ。悲嘆麦ゝ所為ゝ。ゝれのゝゝゝど。小袿舞振の二人の女童共

彼が邪見の火に焼てしぬるなり。ねりひれし申る拘の火ん。焦熱の炎となすり。
炎の雨八寒の氷と変じ。呵責の杖の現れも。つゞ怨もと忘るべき。ゝとけの〳〵
仏偈と。最若げれ声のまゝ〳〵ければ。老僧大喝一声して曰汝が怨魂既曜麦
を狂死ゝ。頻に怨もとるべうしと。又何にく執若して。魂と待〳〵魂と絆
善呼にいる費頭八起さ〳〵ものゝまふぐ〳〵曜麦の狂死ゝ。我怨のうゝと
ゝ〳〵。ふ捨落れもづめ〳〵。又妾閑ほれのしその昔兵と狂
悪とゝ。何の故にゝ斯幸目にゝ。因果報應の理ゝ。空言にてあ
けるゝ。不斗ひ〳〵最期の一念未散せど。もれ迷ひの一つゝ。老僧歩笑ひ
偶ゝ迷とゝ〳〵ぞ悔ゝし。汝悪にゝ世と犯とゝの〳〵つる其人に告ぐ〳〵て
走りゝる是一ゝ良治が側室とゝるゝ神〳〵び。我高貴の女なりせば内室と
ゝ〳〵れんゝのゝ。ゝに欲をゝ〳〵ゝる是二ゝ。又良治曜麦とゝびむく姫婚姻と

うゝに神〳〵び。言葉にゝ〳〵ゝゝゝど。汝も嫉妬の心ゝにゝ〳〵ゝど。是三ゝ
己が罪己と責ゝ他を恨ゝまでゝ。自己が心の鬼を殺せ。善悪不二と
きゝ〳〵ゝ。邪正ゝ一如ゝ〳〵ん。悟れやされ〳〵ゝ〳〵と責ゝ〳〵ど。
亡灵絶て去ゝ〳〵ゝ。良治ゝ〳〵ゝ。渇仰の頭をゝれ感涙袖にて
ゝゝゝ〳〵ゝけり。彼時ゝが姿老僧の眼にゝ〳〵ゝ〳〵ゝ。ゝ〳〵ゝ〳〵ゝ。唱ゝ〳〵ゝ曰。
それ教弘ゝとゝ〳〵ぞ。事理の二法とゝでゝど。仏も衆生ゝ悟と迷ゝの二ゝ
にゝ。其迷とゝゝゝ。忽然念起无明より生ゝゝけて。十二因縁の車ゝ
ゝ〳〵ゝて始ゝ〳〵ゝ。輪ゝ。誓て旋火輪ゝゝゝ。悲ゝ〳〵ゝ。三界ゝ衆生
生ゝゝゝゝゝ。生の始ゝ〳〵ゝ。傷ゝ〳〵ゝ。ゝ〳〵ゝ〳〵ゝ。
死の終ゝ〳〵ゝ。ゝ〳〵ゝ。ゝ〳〵ゝ。ゝ〳〵ゝ。八熱ゝに焦れ又ゝ刀林剣ゝ
ゝを貫き。銅柱鐵坐に膚を焼ゝ。餓鬼ゝゝ〳〵ゝ。餓寒ゝ〳〵ゝ。牛

馬と生を変て。盤石の宝荷して苦患をうる。舊にてやありけん。急に
やのりけ。偶人間天道の善果を得て。六塵六賊に幸ひとうぐれ愛
別離苦の疾海ふかしこそ。同法隨喜のしるふん一法をさわるべ
乃ちを少に罪障を積三途の故郷に帰ること。幾多度ぞや。汝孫ひろし
境に来て。つまぶ代理をもつぶ。同我妙者斷悪脩善聽我説者得
大智恵知我身者即身成仏と。責かけて祈るぶ又戒て云

はかなけれが疾色用なけれが寄ゐ

山和卓僑ほけ杖ぶもげもせど生れてもあれば死もせもひぞト
ふに特念珠ふりあげて。袿を丁度うちもへ又行方とおもう声ありて。
あ〜難有大位の教化とこの。迷ひの雲霧晴けり。一相真如の月の光
愛恋の冥路ぶてし。仏性自然の理をもり。今ぞ成仏ゐ〜ぶると云て声

きこまへて。虚空に紫雲棚引つ。青蓮の華斤こと降来り。妙なる音楽遥にまへ
ひる其光景。良治が夢にこつるとく一点も違ぬど。是も又夢にやあらんと所り
げ。実に宇居虫が毋於杉へ。逢州が墓前にも向んと。杜丹を挿る花台
をもに持。花巻をくちいでゝ。忽然として金色の蜘蛛雙びまさり。往
つ還つ。香代意ひ露代嘗。翼を撲。類を揺し。携持し杜丹に狂へ仏人と
わそれど。猟てとゝ戯けれが最あやしきことにやあらん。蜘蛛の表かさに付
て歩しにとある草舎の前にいでゝ。是則宇居虫が隠家なり。於杉へ外面
に彷徨。彼老僧と時ちの灵竜の問答代詳にきて。宇居虫が舎かるとゝ
ちるとゝくどて。流石ぶしろめゝ。頓にふゝとちもつゝざしが代時慚ぶしりつ
めしとでも云ふ。呼ゝ。慚悔して。誓代払ひ老僧の内者子とかりね
兎角ゐと乃に。夜ふゝく深けれが老僧へ別れとつげ。ちゝさんとゐを

を良信少時とかーこの。小織し助に命て金式布施そ〜労と謝〜けれど。老僧
へ〜にぐふふれど。うち笑ひくいひけるは世に浮る雲となりひ才へ流〜
水に似くいづまとさうくる住家もうく。樹下石上の桑門杜と笠このその
うへ無一物おそ呼ぶうれ。高意を悟に似てれど。我においく用なこと
かく辞して立収も。扨傷を顧て逢州が桂の枝より。桜花の一瓣こぐれる
とうめげ。花を散で蝶おどろけど。人見〜元常の理とうとう風立ぬ
にて花を散を。花のちる式ひく。自散とうとうど。人も又立ぬとつへ。
逢州ぐ殺されつる其夜。風の隨意ちしく桜ぐ衣のありひにてきく。
今こぐれいでつるを一日の因縁ゆ。ぐ花を我に布施ちゆ人と唯一ちん
の花とゆにちく。このぐしる式耳にかけど。遂に去くゆつるうる式
ちゆどなりけり。已〜迎日怪むべ〜彼老僧。徳て式一條の奇変に同じて

熟ちけり。果〜て凡慮のおよぶうるにあらず。信心依堅〜〜くけれべ於
扨い。闇に懺悔ゆつるゆ。詳に待人ちゆ〜せるゆ。不思議にも式女ゆ居
虫に田舎ぐ行れど。逢州ね〜花ゆつて〜。ゆつ。ゆつにき柵巷に熱閑ぐ所にあり
とゆたーゆ行人ちゆぐしゆ。ゆ式ゆこのとにく。一双の蝴蝶老女と式庵に
後〜ゆつるゆ。良信も夢に清涼山に到。覚て後香煙に蝴様の教
しーゆるぐいひぐ。汝を式舎ゆ〜ちびさせ彼蝴様も逢州時ちゆ灵
亀のかりとゆゆつるべ〜と拾ゆけ。さく於扨に携きゆ〜り牡丹の花脇
と位牌の前に。ちく宮居虫に肌の身式ゆ〜ゆ。観音の佛龕を開ち
〜れば。奇なる哉彼老僧の持かゆ式一倫の桜をれ手にとゆ〜ゆ捻華
微笑の〜ゆ容。彼老僧ぐ面に数ゆ〜ゆ。良信再逢州ぐ愛の告式おりゆ
ぞ。扨ハ式田通大土九識の神通分身自在今ぐゆ式に仮よ老僧と現ゆ

教化をのゝしりに疑ひなし。感涙袖を絞けり。切手は最前うり默そと
して居るゝ。あの時聞くはずの逢州なり。又時もの出方をゝえん
お。不思議に仏の化身にあづかり成仏得脫をなすひ其ゝ人敵の手がゝる
をれしとめれば彼土右馬つぶ首と刎ゝ。父君の美意を感じ。
ゝゝ一斉君れ最期の折ゝ。我世ゝとも彼所に往かゝれど隱形の術に
ゝゝて。ゝと幻のぶゝゝゝの。面体はきゝと視きゝゝゝれど。彼方紙奥に赤
し。板金剛をよゝゝし鄙びる面子を歌ひてるにゝ。声のあゝは世ゝ。
彼星影土右つとやゝは今は行地に隱をむりのなゝ。我彼に面会て。
絆のやゝ探へゝと言於扶近くおゝ。彼は放蕩无恥の愚者にゝ。行
地に在ゝるさぶゝ。逢州はゝの最期ゝ。五ゝ者ぶの勇気にや
怖けん絶ゝ抑巻にもきゝゝさびぶ五ゝ者目害ゝきゝ。彼断ゝと安ゝ。

頃日又甲屋とゝ茶亭にきゝゝ。日夜酒宴を催ゝし。是宛竟のゝゝゝ
ぶや。ゝ老女がゝびきゝゝまのゝゝせんあゝぶ。
ゝじのゝとゝひければ良治頭をゝ。不ゝ彼は隱形の術ゝおゝゝひ五ゝ者
ゝゝ討ゝゝゝ曲者ゝ。ゝゝゝゝゝゝ女の力にてゝけるゝ変おゝゝ。又彼が
妖術ゝ折計束ゝゝや。夫きゝゝゝとゝいゝ。寄居虫着ゝゝれば
ゝゝ一斉今役にのゝゝてゝひゝゝゝあゝ。滝は元无仏にて其光明し。故に
畏昧妖怪ゝ幸体ゝつゝゝゝ。彼幻術をゝゝとのゝゝ滝ゝゝて
照ゝゝゝ姿ゝ頭ゝんは必定ゝゝ。援神紀抱朴子の漢書ゝゝゝゝ
物語ゝゝ故に古鏡をゝゝ。常に肌身ゝゝゝ所持ゝゝゝ。
ゝゝゝゝまでゝひければ良治殆感じゝ。ゝ時旅ゝ扇を坐具ゝゝ。
念仏唱ゝゝゝ。ゝにゝゝゝ牡丹花一瓣扇のゝゝに落ければ良治ゝ

観音の化身
旅僧となり
教化をほどこす
時香の塊神地獄の
呵責を脱れ成仏
ひとときまろ

默頭て腰扇をうちひらき。坐具とゝる扇のうへにうち重ねくいひけるを。
我儕に清涼山にあり。むき。夢に狮子王とゝつるを。覚てゝ一双の蝴蝶と成
ぬ今れ此腰扇と重ゝその形ち。翼をかさねる蝴蝶に似たり。されに牡
丹の花枝梅ひ狮子王の頭にかゝぐり。散楽狮子舞を今猿につゝる也。
寄居虫八掠をうつ狮子舞と姿をかゝし。土ちゝに近つきて。やゝく
敵を討ゝるべし。逢州ぶ幽亀奮迅る狮子王もゝとも。狂ひうるふゝく舞
かゝるでゝ其詞を。いまなほ知ぬくゝ。扇をとりてさゝくゝと出ぶじく
ちへ入りひけるは此小織ゝ助ハ家の老臣雪枝孫太郎の一子にて、
初るゝ女をいへべき顔色あれども力量なゝの若人にはまされり。又寄居
虫ハ男を取べき勇気あり。殊に姿のたゞ成やぎる。雄雌唯風よりき一対乃
夫婦なり。こ成りくゝとに互にいひかゝゝつゝ人もあじとる。今宵也

に猛成むとひ。共に力と今ゝ。伐と対ん入いろにゝひければ於板切平ゝ
大に荒びゝれゝと於びてもゝき幸なり。寄居虫にもゝく養ゝ
せゝゝゝれど。顔さと赧うゝ。油の振とゝゝとづて。天に一言乃初
ゝ小織ゝ助を退きがらにて。並居を面なげる。良久頗趣とゝる者
りれべくゝを彼ぶ意中成ゝり。何にまれ二人とも。我言手ゝをひゝゝと
おびれば。是ゝり旅館にきゝゝべし。甚後ゝきにゝゝ入ゝゝ。寄居虫
小織ゝ助成狩ゝ館にかゝり。家臣に命ゝ。彼ゝ婚姻のゝりもゝびと
なゝゝゝゝるゝ

第十

寄居虫狮子舞に打扮て伐と対
古鏡の威位土蜘門が妖術成破る事

ゝゝゝゝ星獸土右ゝ。老女於板のいひゝたゝゝるゝど。市所の五郎義が勇

気烈きにちがひなし。柳巷にいくらもぐれしに。彼ハ主人の寵愛他に異なる。逢州式殺害ス。其分説々切腹ゆるせーと風聞めれバ。ともかくも公ならんかとおもへど。是も我と嫌く計果にやめんと忽地孤疑の心懐まず手下の者式つかーく仔細と問セ。漸く枕をまくら眠りけりさて太九郎煮兵衛人日毎出ならぬが隠家にきたり。首領に行こーかこりゃがらにく過のふ柳巷にハ式杜鵑花にまるる花もめくべきにと。さぐれ動き。門子の悪掘とうらうれ日暮うつに徒を俳徊ス。例の朝当三志業外ものよかとつかく喧嘩と買。往来の妨へとるとといへど彼ホが很藉とおそれ。雑めってうのハ者ちゃうけ。扨一日出ならぬハ両人の手下へ走ぐ。彼甲屋にいうけるが主人ハ家にめーく。四十ばかりとおやーくて。祝熟ごる男いで向へ坐敷にうるひけれバ。出ならぬハ行りつ由徳と向彼男答く曰ハ

子ハ式甲屋の惚にてゆが。主人頃日病めりでる客式餐意まのーきとと公に仕せどさる故にて外れハ別室に移り。小子とともとき付ハめつぐ。向表ー・黄ー・柳巷にいてーせ。ハりハかるーど。坊せるへ。頻て酒肴とおぐ。式主人を行者とつに是則切平ゆ。つーく出ならぬを伐敬ゆるを見きハめんそーく。仮に甲屋の主と打拾ー。悉於拔がそーひなりかくー切平ハ出ならぬがーちゃうひに公式ぐめ。又彼が声音式サに付とゆきてちりーるとろちゆり。十に八九分ハ敬ゆるべーと公に表びその席式ちりでまかれて式家にまねまきまはれ小織ー助家居虫と閑室に伴ひていひけるハ小子式甲屋の主と仮ゆ。出ならぬが為体と察ハ一育君式害ーるる敬にうぶひめるべーど。是天のるゆるとろうれバ。鬼てる角てる今宵のうちに宿意と晴さセゆべ。かつハ小織の為男姿にて居

なくば土左衛門も欲ある身となひ君に然ばゆるしまじ悪をいれて女ゆゑし
髪とはひあげつ宿居虫さへもろとも舞妓とならんり。良治君の宮ひしまぎくに
獅子舞は打捨欲に近より。本意を遂させなんとは又宿居虫さへ
牡丹小織の両人小桜と侯に斯く弥べきぞ我は只管土左衛門は酒盛
酔ひと澄して後かしこに請しまゐらせんと其用意を調へおきし元の座舗にたち
いで。大盃をめぐらし既に酒も闌となりけるとき。切平はひけるへ小手近へよびよ
せしかへる舞妓牡丹小桜といふて両人あり。某の社に神変あるにより練もの
にいでさんさふ。獅子舞をまうすべせしが。此所によびつどへ一指舞せ酒宴の
興にそへんやと問ぬ。土左衛門へ上座にめぐしめく。寛々と點頭ぞ是
なそうへとくき見物すへしん。まづ此席に招き彼等二人に弱とらせぞこの
うへ舞ずなばものぞむべしといひければ。切平さしあたへ牡丹小桜いそぎ此
方へまゐるべしとよびつぐ言葉にちるがひ。頓て宿居虫小織し助の両人舞妓
に打捨なるかに粧ひし坐につきぬ。土左衛門彼等が艶なる容顔をうるから
よ。まがふをきゆめき近くきされよおがでるをありと。両人と右左に居し
が戯れしいふ互にまさりおとりぬ色香あれば。共に花の王といふ主の我
ぞきさんにて。牡丹小桜といふ名のへけれど。牡丹に廿日草の名あり桜に夢
見草の異名あり。かくてむしべ百夜を厭ざる残。廿日といへぞ限ちあれ我は夢
ぞりの契あへるのはじ今宵をかに結びまして園に植かへまくおもふなり。
彼楊妃が弄せし一捻紅。神に祈て盛を延納言が愛つる花なりせば
れ汝ホにおよぶべきと。只管よらひれければ。宿居虫は怒気に堪かね。
土左衛門がとくへしる残なるなひたらかららんとうる両持と。小織も助なくや
よむづきやよ杜丹とくと便宜残うかくへとらひつらんとなを忘れしうと押隔り

て紅れど。天にそびまるけしきなり。今氏期と延るべ。又いろ対ぐまぐ「いや討
にくまぐさ。「いや其呼のきの人小桜ぐめと。牡丹の花は息まきあくく。
裾くくを折てくくうむ人が土ちう佶度くくうくくをり。そうへぶる女ぶ為体何とう
うつと問かけられ小織く助答くくいく妾がまるるびく獅子舞にん八拍と
つくくあり。牡丹がつまくひくるも。彼八拍とうつとにくくぞ付るべ。土ちう又
曰その笑にてあるるべ。疾舞くくくとべくと堅にうり。辞とる巴ろく両人ハ
坐とくらあげ。扇とかくれて獅子の頭とうう。是を須にいぐき色ぞる
羯鼓と駒にかけ。もにく牡丹の花紙ぎう。彼牙の坐蒲に練いぐつ。両人声
を舂くくとかくぞ歌ひぐ付る

吉野龍田の花紅葉更科越路の月雪 カワユ太コヨリ

獅子舞

土ちう人秘曲くくれ。猶てやぐる盃の酔とくく眠ひまくる光景に宮居
虫ハ走くれば又眼どくくひくき盃をうりめぐるくくぐやられどと小織く助
宮居虫に目くぐせ色 獅子関乱拍の武楽の物牡丹の英ふりに蒲
大きくくまきくの獅子頭うてやまやせや牡丹房折節はとく両人ハ牡丹
の花をうとくれば枝にもの氷の双振の袂にかくく。彼獅子頭
とくくや。うてと目とひき袖をふれつ立舞けーきくくくもとう。
歌と手ごりにちうけり。浩野へ九〇義にちうびく。梶原平平秩父
の重助とたぐや宛竟の若者障子のかげくうのくれいぐ狼狽さぐ
土ちうぶ手下とくくあくくく人武奴ハ吾们がよきにちくくんさくく不
意と遂ぬくと投のけつ土ちうぶ側にくくせもつけど。土ちう付たる
由得とくくくちくどれ才木我とかくく小ろくるくく宮居虫が小狩刈て

山崎文庫蔵

つまうるせば小織〻助り〻汝陸奥にあり一時蛇田村の地蔵堂に隠れわ〻老人を害し金百両うばひとりしてゆくへもしらず。主ちらひと打笑ひちら〻其老人と我害せしといふ。橙枝ありやく問にいふ。家居虫彼賊布とうりいひ。汝日外杜鵑花ごのに手へふる武賊布ハ琵琶魚の皮にて作り〻にて良治公の所手匣にあさちあり。とわ武〻〻の面彫めりて。妻が父あづりうせし武今汝が所持ふるとの人父の最期ハ其方ら追放せしに月日ふれば敵に疑ひめぐらばとの人をもまくるど切平ど。かゝ〻打ふる刀の柄にふれちかけいまいひまし〻そのくに隠形の術とおふるふとそ。是又一ツの證拠なり。我ら甲斐の閂とく空言汝にあくなく討れふる。園の一舟が下部切平といふる者を夜折〻く彼呼よ走つけ。主人といふ〻ふり解しが遂にふるなくふ

斯かするくに逃ぬとシろつく打ひかきて敵と名告て討れしと三人育〻くつもりせう。主ちらも刀ちんとりふ汝あがつよどく我袖のけふう追放ふれ。路費に充べき金成汝ん〻老人と害せ〻が不知彼ハ右主良治が茶道の師園の一斉とふ者にて。浅間の舘よりあづりうせし金ふ歌妓の牡丹とつて〻女ハ則園の一斉が娘にて。遠州の妹家居虫又小桜と名のりハ浅間の老臣雪枝弥惣右が一子門名小織〻助長治公の命にふて。家居虫と婚姻ふせば我〻ふれも外父のかたき敵ふ我を討んど計策にくめりこのふにも一斉とやふんと害せ〻ふもの主ちつにてのりけふぞ。ふるも其夜ハ朧月。訳の頼ふ〻手ふめだ。実に武家の主とおりひ小織〻助ハ元来幼年の割ふれば是以ふ〻ふくかくふと保にせ〻れ〻ハ我運の順ふふ。元念に晴といふ〻ふ人ハ汝ホ

さてまたびかりんが我に徒なる双手あり。汝まうして我首を討んざる式。安閑とまりてかくべきやうや不便なれども及討んちくはさせんを悟せよと刀ぬきおろしひとつ三人ともかるがるく抜合。少時がゆるぎ戦ゝが原来小織ゝ助へ剣法て熟練なる若者にて。其上君命に依ての助太刀なれば命を塵芥ゝもかろんじ。ふこちらく切むすびけるに。土左ゝも彼が早業に驚かゝ。やをゝ老くゝとゝるぶ。例の秘文を唱ると斉ゝ姿八文にゝえどおりて白双のゝ空に躍り。さまちまゝどに打かけり。家居虫へ紅ゐて兼ゝ用意ぶかきゝ。衣鏡をとりてさゝりけゝに又金色の蜘蛛二ツ。ひとつとなく走きたり。彼衣鏡の光りと助け候然ゝ走めづれば。土左ゝ姿元のごく現ゝかりしゝ三人大に力を落。遂に小織ゝ助が切むし刀。土左ゝ打ゝけ損ゝ。衣ゝり袈裟にきりさげられ。呵と叫びくたくれ伏と。家居虫も

イヤとうて父の敵おがくゝと。遂に首とうち井に。三人斉ゝ走びと勇ゝ土左ゝが首と水盤にて洗ひきゝ。一斉が位牌に供へけゝ。於板も過刻ゝ式ゝ式ゝ式ゝ式ゝ式次の間に寂かゝ。ひさゝにゆざかるゝ。今土左ゝ式討ゝとゝて。漸安堵のおりひとゝ式呼にゝちくゝ共にゝちびつゝ位牌と伏拝ぬ時に二ツの蜘蛛ハ彷彿として。土左ゝ義杜鵑花が姿と化ゝ。ゝ歓びゝ。ヨメ年の寓意とてゝしまくゝもんとゝ。竜魄中有にさまよひ影身につきそひまくゝセーが人ゝ成仏ゝ。又元の蜘蛛とゝ。虚空遥に走さりければ。こまゝ奇異なるとにおひさゝ八日外花行の牡丹にゝゝむれ。なりゝど家居虫が家にゝちびきゝ。二ツの陳ゝ。彼ら二人が亡魂にてゝありけゝと感ぜるゝに。又ゝ於板とゝ式かゝりいど敬ぶゝちに侠伝ゝ

是老のつれなりけり。倍呼人五郎が女下の若者。右九六素兵衛とかゝるそうてひき連りければ小織〻助めゝく甚労を謝し。山両人の悪提人良治公にめしこゝも苦なりて後さて。鬼も角もゝ〻ハんと。縄つきはひきゝく。いそぎ良治公の旅籍に赴きゝ。かくて良治公ハ復離の一條詳にきゝし。やされ斜ゝ〻どゝまびるハ素平右衛門九六の両人ハさるぞる罪のき者ゝれハ命と助和ひ放つべゝと仰るに。両人も良治公の仁心に感復ゝし。まれゝ善心にゝちかゝりける。趣小織〻助仁。あゝ〻この加禄をくだるゝ。めゝさゝく宮居出と婚姻ゝ。切平も武士にゝりゝてゝひ陸奥に移でくだりゝて後於移ハ彼一斉ぶゝゝれゝ。蛇田村の地蔵堂に庵を搆び。一寸八分の正観音仏念打仏ゝ。仏道堅固にゝく。世俗ゝとくゝおゝりけ。又良治ハ年も若ゝゝゝいるゝ世往ゝめゝゝざれハ鰥にゝく。ゝゝんと

あゝかゝくゝと。老臣のゝゝめにまゝゼ。故ある家ゝゝ再妻を受室夫婦の中ゝひ睦ゝ男女教子の子ゝゝゝけ。昔に倍して家富栄ゝとつばさゝ。斯めでゝゝき折ゝゝ。往年ゝゝにゝる。清涼山石橋の光景をゝゝひゝめ微小織〻助に舞ゝめゝひゝゝ後代にてゝゝる流曲ハ是等の変ゝゝ。けんと。例の手ゝ狂ゝる空三郎最ゝゝゝ偏ゝ。唯善ゝるハ栄悪ゝゝゝ亡の天理と。童に教る絵讃ゝれハ。誤も多ゝゝゝ。備の君子さいひ。ゝゝゝゝ。

全部 筆者 中尾

附言

式書一亭の主人唯戯場に古くより中しる。浅間ヶ岩乃狂言ふ
よりて編が必よ。面影草紙ふ之りし。亦後帙を執着と標題せしい彼
狂言の尾に獅子舞あり。石橋英獅子執着おどりの。石橋ハ謡曲に
ありてかを家に口傳わるべけれども。其名をもぢりて執着潭と
よぶのし
後帙著述に臨で側に人ありて。戯場の獅子舞に扇を重て獅子の
頭をはらる。謡曲を用ひるそうと予原素謡曲ヨ跡し。変にかわく
ゆそを用を読に是又復讐彼書に友治わり。仏出に良治わり。仏と
ひそ和こふい對句に似う名をもみぐるの。浅間のけう

辛ふとゆまを図ありて。總て時合とゆ。故に復讐の一段ハ
よりてはくれり
人名ハ大じ仮はしろうもひけりうもんど。土右ヱ鏡ゆり。ほれ沈乃義。町
物語に見へしり。前編後編喧嘩賣乃係を彼書よりて編ア。若乃
五右ヱ。そうるとハ。青我物語ふ。元祿女の車にて。ゆつるハ。おの表を出
しりハ。ゆまる水和水徳年間乃物語ふ。ゆりけん。
かる觀草紙ハ是ホりとにわ。ハ。まど。書ハ專ハ。稼を。ゆ。文ハ。昔乃
さほふく。膿漆。百色染。黒紅乃頃結。かどけを。古ヱ乃遠ひ是のこに
もぎりうど
茶乃湯ハ東山殿にはじり。三法ハ水祿乃頃より。はまふれしハ。ゆ。乃
ゆどまりうり。水和年間にそりとを。狂言綺語とえゆる。

因に云ふ四竹節乃起いはしも半九郎ゑるべしこれ半九郎節
ともいひ偏也〜都町ぶしの類種これり其語略今乃四竹節
似うの行をも挿ずとるハ夫よりゑるべし

編者　榊亭種茂

畫人　蘭齋北嵩

縷ゑとり昔木偶

ちゞへとりさ名ハ
四つ蝶ノ
焼や編ぐさいんでむ〜〜〜乃三茶がらひ浮ゑの吉ゑがごとし

わと。狂花乃旧香が傳。其名へきまゝゆる長清節。本手端手
て。曲子にゑ〜ひ。緋向へ子にゑる近松翁ゑ鉢後塚の正本。
ようて。世話ふ時代をとり〜まぜて。四つ乃胡蝶の因果也語
わふれに世〜〜き冊子ゑり

補像劇人　朝倉伊八

文化九年壬申
孟春發兒
開板所

心齋橋通　塩屋長兵衛
善林清兵衛
中村屋幸藏